

一  
医  
子  
雜  
話

七

490.4

Ij-3

7



No. 259



富士川文庫

632



上代ハ女彦名命の御傳のくまて異國の方ハ不傳

丹波氏の先祖後漢の孝靈皇帝の曾孫高

貴王の子志<sup>ツ</sup>奴<sup>ヌ</sup>手<sup>テ</sup>直<sup>チ</sup>日本<sup>ニ</sup>渡<sup>リ</sup>丹波の國住す

此子孫ニツ別ル一ツハ丹波氏<sup>ニ</sup>禁中の典<sup>ニ</sup>導<sup>ル</sup>の

内也一ツハ坂上氏<sup>ニ</sup>て代々禁裡<sup>ニ</sup>仕へて坂上田

村丸<sup>ニ</sup>と是也又和気と云ハ半井家<sup>ニ</sup>て是ハ

日本垂仁天皇の末孫和気清麿<sup>ノ</sup>末也然

はる丹波の家より相續して半井氏ハ和気

とより別<sup>レ</sup>ま<sup>カ</sup>る<sup>ル</sup>を丹波の余流と成を利依て

和気丹家<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>家<sup>ヲ</sup>日本<sup>ニ</sup>医道の大家<sup>ト</sup>也<sup>ナ</sup>南嶺遺稿

家綱公御臺所ハ伏見一品親王の姫宮にて渡りて  
のふ延寶の比乳岩を煩みせ給ひし時典藥  
を召御脈を見せさせしふ糸脈と云夏有り  
其糸を以て良醫ハ女中の六脈を診し其  
比の典藥の人々尤糸脈と云夏傳と候得共御子  
の寸関尺直子何ひ奉みてハいくつ造り究多配  
劑の成なき殊に乳岩をとい直子療治仕りて  
膏藥已下膿血の滯るる知きこと各申  
交尤子思召し公方極まり御免下さるの御  
夏也此旨願ひし御臺所聞せのハ女ハ死すと  
云共其禮を乱さばとこそ聞し今追簾外の者  
御對顔なき身とて今更命なきといつて  
公方家乃礼義を乱さば乳岩の症ハ千人  
を人ト助る夏那と云はれぬハ覺悟の命也  
若天命何をも糸脈にて試し膏藥付て膿血  
自然に治さず期有べし迎て生きまじき身ハ  
直子御脈をハ見せし禮しと有て終りし其夜  
薨御形 群玉集和卷七

愚四十年前田処町辺に心易く立入りの有り反胃の症  
を煩ひ食ふに忽吐せ或日予う方と素麩を与

一は暫くして吐せしを見内は蛔虫の形をして食ひ

新為き皮の内は五節六節死を見元と収物

きく見ゆらち死を新腹中に入く忽虫を

成りしを眼前に見内處也吳病乎骨格著聞集

朝鮮人參の夏百有余年已前ハ壹兩有銀十三三

々の價也夫をに殊外高直成由きて適人參

を用内人を見くハ相々笑止成夏哉と皆人の

申すくハ古老の嘯也予若き時享保の始

ハ余程價貴く成ぬ共今より見きハ若干

の遠い也對及屋敷へ所望母をせハ一兩有三十

五六兩宛きて今の人參と遠い生き取りのよき

大人參有り鬚人參杯ハ女ハ身を持てる者ハ

不用と賣店ハ高處と夫よりハ高直取ル共今此

直段とハ大ハ縣隔せり今の如きハ賤愛者の病

難ハ迎と救者ハ夏雜同上

薩州鹿兒嶋俊寛橋瀬戸口とハ御家人ハ肝付

源之進とハ有之此妻按摩する目のもつる

小兒の虫何きのくとも見て瘡治す直する

奇妙也又積痰の病胎とハ見内入り治する

我ハ瘡治致貫ひハ奇妙也薩及志今此人存生哉不詳

世俗は頭寒、足熱せりと云。醫書にも壯く何の據  
もや善く止観者八世該は曰欲得長壽當温  
足首ト云是よりあり云カ 蓋尻

紀伊垂相光貞々御不例也七日程食復召上りまは  
寺嶋通仙より上人参御服用然はへしと有宮  
瀬元貞より上は八人参ハ以の外然は應るらん  
と云醫論まありくとも不決光貞公のふハ彼等  
ハ醫師の老切ありし依て斯の如く了等相凌  
少はふ公既よりし所詮薬ハ多用也と御  
意より御薬ハ御服用せし不日御平愈あり也

北山壽菴ハ廣学淳実なりし諸國廻りし中北國  
より津浪有り其処より了海と云禪僧有諸人  
浪の来はを悲れく是天命也とて座禪をせ  
少其内より高浪ありし海より入は又砂の  
上より死骸ありし浪より入りし諸人集りて是を  
療治する諸医良薬を用ひれ共より下毎時  
其菴を移む壽菴より死骸の傍より脈を  
とくを診して退く諸人何れも薬を用ひ出  
哉と壽菴より云如斯天命を知し死する  
人より用ひて獲生を不彰是天命より反く也と

云諸人其高論を感嘆す妻老後也召若山  
頼宣卿は仕ふ若山の諸士を療治す。其月  
比を人の士らぐふ諸匠時疫也と云す妻考う云  
イヤ食滯也と云平胃散を用ひ四五貼用ひ  
て後黒き物を浮夫妻菴其黒薑を考ふ兄  
若おはか食せざるや其時病人もを治し云  
南春四月比おこを食オコナ即車  
前草苗ナリ云夫より已  
後何と云ん服合悪妻覚へく久敷夏故  
夫ハ心付く云壽菴云是正敷四月に食せし  
おこの滯也と云愈四味の平胃散を次方  
平愈せし也又石田某久敷脳之腰を諸匠手  
を治すし得共不治妻菴に見せり壽菴脈ヲ診  
し是ハ疝氣也三和散を用へしと云石田云只今  
疝氣と諸匠見立られて三和散用ひし候  
得共其驗云し三和散用ひし其時  
妻菴大笑し云く足下ハ鉄炮の故手と云人  
其術を教へくし聞併其心してハ鉄炮の利  
をくし其意趣  
を問壽菴ハハハ鉄炮を打し曰く筒曰く  
間敷く足下の鉄炮ハ能南りオ子尻の打炮

ハ不中是ハ手續の難キ依テ彼と我との間敷道  
具の法アリ合公の覺悟ヲ穿テ処也藥モ亦  
斯の如ク曰ク病おぢぐ藥モ其調合の人乃  
七加減ヲ依テ病リ的中ニ處トスルモ是  
療治乃切キ不切キ也何事乃醫師の調合  
ト一黨ト極むハ則是曰ク鉄炮曰ク藥モ亦  
トモ上手ハ南ノ下モハあつと云フモ  
不効キ也爰を以テ鉄炮の利ヲ法ニおん  
ト云フ出ト云其時石田殆感服ク妻菴ハ三和  
散を服ス由テ四十日程ト平愈ト閑窓雜語  
浪花一醫類上ハ一痛を生ス始稍少貯カ一五年  
の内取稍大ト梨子大の如ク予ヲ治療を乞フ  
診セテ血瘤也如何共アリト依テ同辭ス  
後田中方菴方ヘ系治療を私ト由是と同辭  
ト同辭セト故ト後沙汰ト取テ一五年の  
後田中氏来テ予ヲ諾ス其後愈肥大ト成  
ル故泉及埤在島の花岡氏ヲ治を乞フ一診の後  
云是真の気腫ト云者也世医の知マの非或治  
療ヲ依テ治ス予ヲ治を受人と思テ大鯉  
魚三尾を枳朮同厚ク夫を藥劑ニ共ス

其三尾を以て骨を不残食し、（子）夫を食  
 して悉く治瘡致し、可然と諭され、（子）故案外  
 の夏故大り、（子）悦ん、翌日大鯛魚三尾を送付  
 廿七日の後、鯛魚三尾を食して未だ瘡故早速、  
 食せし、一著口中に入付、其臭気如何、昔屢へ  
 して、誠り、（子）堪え、（子）忍ん、（子）終日、（子）漸く、一尾  
 を食せり、又翌日食せし、一視、（子）忍、（子）心出、  
 一向、（子）食、（子）不得、（子）止、（子）其日、（子）止、（子）みぬ、（子）其日、  
 未診、（子）故、（子）其夏、（子）を、（子）諳、（子）り、（子）多、（子）子、（子）如何、（子）様、（子）の、（子）し、（子）其食  
（子）射、（子）し、（子）其、（子）一、（子）尾、（子）を、（子）食、（子）し、（子）悉、（子）せ、（子）り、（子）又  
（子）又、（子）色、（子）々、（子）々、（子）と、（子）其、（子）口、（子）掛、（子）り、（子）一、（子）尾、（子）を、（子）食、（子）し、（子）悉、（子）せ、（子）り、（子）又  
（子）一、（子）尾、（子）の、（子）由、（子）と、（子）咽、（子）り、（子）不、（子）下、（子）故、（子）見、（子）合、（子）せ、（子）り、（子）何、（子）と、（子）形、（子）氣、（子）を  
（子）惡、（子）臭、（子）食、（子）味、（子）と、（子）已、（子）前、（子）と、（子）不、（子）進、（子）矣、（子）其、（子）契、（子）性、（子）を、（子）腫、（子）物、  
（子）ハ、（子）次、（子）方、（子）子、（子）腫、（子）物、（子）柄、（子）子、（子）先、（子）へ、（子）ら、（子）ら、（子）花、（子）岡、（子）氏、（子）来、（子）り、（子）去、（子）日  
（子）の、（子）臭、（子）食、（子）し、（子）悉、（子）せ、（子）り、（子）又、（子）向、（子）漸、（子）三、（子）尾、（子）を、（子）啜、（子）悉、（子）せ、（子）り、（子）と  
（子）偽、（子）つ、（子）と、（子）谷、（子）へ、（子）り、（子）と、（子）一、（子）診、（子）し、（子）至、（子）拒、（子）取、（子）と  
（子）能、（子）た、（子）り、（子）有、（子）り、（子）と、（子）先、（子）針、（子）を、（子）施、（子）施、（子）し、（子）と、（子）針、（子）を  
（子）い、（子）き、（子）針、（子）を、（子）入、（子）れ、（子）血、（子）多、（子）く、（子）漸、（子）く、（子）し、（子）膏、（子）月、（子）藥  
（子）を、（子）施、（子）し、（子）後、（子）出、（子）血、（子）一、（子）白、（子）子、（子）不、（子）止、（子）り、（子）出、（子）血、（子）次、（子）方、（子）り



元氣と疲勞せし故色、服藥を轉レらば、  
猶レ疲勞加り、故ニ田中氏を又招き、  
らうニ田中大聲ニ一診固辭レ、  
只傍觀リ、往診せしニ次方ニ衰弱ト、  
ハ花園氏ト不來、  
少ク出血ニ不留クと珍敷療治形ニ、  
氏未レし語ル也。

一 按芟拓草ヲ以テ鯽魚ヲ煮ク、  
一方の由其門人の話也。

痘瘡乃造化之殺機、  
沿習之論、但云胎毒之所致、  
後再幸有謂初生之時、  
十月勿食醴、  
稀豆諸方言、  
共胎孳生者、  
凶不同、  
至有一村中、  
人之比、  
文政十丙戌、

紅毛人江府ニ參勤の折、  
浪花滯海の節、  
ルト由

集り日々奔走諸病人を診察せしむ大抵  
を治るを志する海あり皆難治多きを格別の  
柄と取し京地滞り中蘭人構上より落ちて  
行歩自由なり又京地蘭家新宮秋吉小森吉  
雄藤林等競走共別より依り依り旅宿  
より藤水次より整骨家を招き治療せし  
しより二日して平愈せり紅毛人を大に其奇術  
を感心せしと蘭家の窮理の益然くの如し凡  
此度蜜船医といふルト格別の名手非ざる  
又知成へしと京師の人語りし事

痘瘡無花果の胎中より其母情を費  
以夏多く食品を不覺林を侵す故に胎毒  
滯りて發せり此瘡形は上吉質素  
の人には是を受持を常は夏少く能身を  
蘇るに由りし也故に是を不病下畧南嶺子  
或云薬に依り鉄氣を忌み鋤刀にて坐り日用の飲  
食を炊く鍋釜皆鉄氣にして其飲食の腹  
中へおさるる薬收れを坐時より忌みて同食  
を忌まざるや不審予云理屈と多く記せり此  
志を屈するは是夏也顔を洗ふハ盤有梨

足を洗ふるに盤有り是を別して清と次とを  
立法の法也然共居風がちと入る足より入  
らざるを不得故也成夏と不成夏の差別有  
其成否をきかして成を常と云ふ理の爲に  
葛藤せらるる夏哉と答へて同上の意  
癩病を治す法不女と雖効有るも稀也宝曆年中  
の夏時々尼崎の人何某姓に不化癩病発す  
究て面色を變じ兵庫まで遠國の遊僧を逢  
ふに旅僧法を知りて其人を裸し全身を熟視し  
後脊骨を赤くぬき切りて血をぬき此血を壺中に入  
る人の不至処の土を埋み置てやがて病は治り  
へりて別きる又三年過て此僧又兵庫を来  
り梨志のむむ其人云葉の如く病治るを法を深  
く感謝しこれ僧の云く埋み置て壺を掘出  
し見ゆをばとて古の封を解き壺の中をば  
埋む時、後壺乃底に滴はる有りて大  
き増して壺中を滿る有りて也僧去りて再不  
来名も不知法も不傳哉天下の至宝希代の  
術也世間の法の傳へる有り哉是即予

知まば尼崎の人未づくの實説也 椿園雜話

文政五亥年八月末はくくく世上下吐瀉の病流行

してこの難波津にハ數万の人形ハ中

ハ此病よく死ハ復一日ハ其數を知られ

野也送りの式又ハ僧尼の輩東西と形ハ

歩行き葬式ハかく男子ハ足を空しく

くハくくハ復幾度形ハのハハ

ハハハ海ハ凡送葬の復ハ刻限の礼ハ有

形ハ朝と形ハ昼と形ハ野也ハ送ハ其

死ハ人の多クハ也此病を世俗三日ころ

ハ三日許ヤハ死ハ故也其初ハ八月の

多の流行ハ九月の末十月の始との復也

病ハやハ人ハ常ハ女ハのハハハ至

こハ形ハ者ハ多ハ病の姿ハ朝夕昼夜の定

形ハとの復ハ今迄酒のハ物喰ハせ

ハ何と形ハ腹のハハハハハハ

多梨ハハハハハハハハハハハハ

或ハ痛ハ又ハ痛ハことハハハハハ

ハ如ク水のハハハハハハハハハハ

二日許ハハハ吐ハハハハハハハハ

一時に発汗するに有吐止法は其の如く物皆水也  
又或るきよもの一日二日ハ何るも老幼に同じく腹  
の浮き故に病人と医師と秋の土にめにかく  
は病の有るもの也と思ひく警をせざるを三日  
許とあるははやく何となく胸のゆめいあ  
く多形よく薬と何と皆吐して手足冷脈を成て  
一時二時許は先止法也凡此病乃をてめの程ハ  
痢病霍乱形人々例有は者と思ひく附子人參  
の屬用ははやく其驗ありてむとるは  
して一人二人と形く病病人の多かれは極に近き  
比唐國の如く疾病人の如くと思ひくは醫師  
といてきよく忍冬金銀花の屬をへて敗毒のを  
を煎り水は冷く用はは稀は其下をきくと有は  
然れ共之種を識の痧脹病ありやと後には  
放血ありて醫師と其病人はあま手の指足  
の裏くえん人とをえして痧筋脹くと思物形ハ  
鍼として血を採ふ夏と有りき病のうるきハ下  
をふくと有りきと推形くハ先を救ふと云  
程の夏も形く世は長沙の流をいひて古方家  
と云く醫師ハ是ハ傷寒論云ハ厥陰病

形中として呉茱萸の屬を主薬と云ふ也此  
かち其病と云ふもめくくやまへりく流行  
病也これ疾脹病といふは近き所有り冷薬を  
用ひるに下有て害取く熱薬を用ひるに害有り  
下少あり此病始より身壯りやく貧乏物  
有りて富貴の人より毒又知物より更に取  
此病は石羔を引ひて功を得る人有り冷薬の  
下有たり近く或人餘りの苦くまた下を  
出て井の水をのりて死を免き又田舎人の云  
隨ひく田螺と莢の葉を煎して是を用ひて  
死を免れり人有り之り又大黄巴豆の類を用  
ひく病のちりあより取故に毒気内攻せ  
と云ふは有りて此流行病なりと云し  
よて何某の病と云ふは病をいふを云ふ  
其薬ハ志ありあき夏有きハ医師おともあつ  
さ梅くして石羔或呉茱萸と云ふは下を  
得きハ方人と同くこと思ふは世の中の人心始  
ぶが叔人參附子もきく其下なきことあり  
さぬと一人も下をいふは皆同く多きは又多  
べき今ハ昔あつたことと云ふは病の流

行くと人何とて死せしむる有りとも是より此  
度ハ西國より流行して難波より京師の地に  
移りや、東國より流り成りしと云ふ事ありしを  
人々もあつて病流りて死せしむる有りとも是  
を云ふ事ありしをいふ事と婦女子の俗説取あり  
足ありしと云ふ事共世ハ呪と云ふ事と有せハ  
傳子九子記す

いそふ御裳濯川の流り波む人々は疫癘乃神

峯ハ八ツ門ハ九ツ戸ハ云ふ世ハ伊特諾の代ハ云ふ事あり

人王五十二代嵯峨天皇

いそふ家々の石ハ張多くと疫神ありと云ふ事あり

豆腐ハ小梅二粒味噌汁にて食す

焼豆腐二切小梅二粒是ハ味噌汁にて食す

黒豆六粒白米一合小梅二五箇白粥にて食す

青芽 霍香 木香 丁子 乾姜 各煎用

又

雄黄 十反 雌黄 三反 猪牙皂 三反 鬼 四反

白朮 十反 虎頭骨 一反 竜骨 三反 菖蒲根 十反

白芷 五反 薏苡 三反

右十味為丸白湯服之

以上宇津集負出

淋疾をせううつと誤はハ消渴淋瀝と云を誤  
梨多あり也高京明備忘録

寧生抄云寶永二年乙酉歲讀列丸龜豊人町廣嶋  
屋茂在廣門夫婦共子年三十九二月廿三日朝寅の  
時女子一人生同廿四日夜亥時男子一人同廿六日未時女  
子一人同夜子時男子一人廿七日未時一人同夜子時一人  
總テ六人前後五日の間ニ誕生也其日男女別由死在六子死在廿  
四男生ニ 理存隨筆

痘原説 佐井大瑞先生

古今諸家論痘原或謂母胎之遺毒或謂飲

食之毒或謂父母慾火之毒或謂疫毒之  
一種諸説約々不一要之但窺得其一斑耳遠

氏曰痘毒者藏於骨髓瘵感而出亦謂其大  
概也不能無語而未詳之憶夫痘者人身固有  
之靈液而一毫無拔毒也其液至清而靜其

性至薄而淡常藏於骨髓之中不混同榮  
血之濁液又不合和衛氣之清津外為風寒暑  
濕不被感發內為飲食飢飽不為觸動依

然待感觸之氣到來何哉曰風寒暑濕天地  
常有之氣不能觸發痘液一種南大洋中來大  
温之異氣能感觸之孫兒偶會此異氣痘液



直感動湧溢是以元神激發忿怒其勢如奔馬  
 欲排出之榮血中榮血不受又發猛劇之熱欲驅  
 逐之皮膚外面榮血抱合而衛氣傳送榮血舟  
 也衛氣水也舟堅而水滿何有殞其載之患哉  
 驅出之皮膚外面則與身內之活機阻隔遂自  
 腐敗為膿收靨結痂而止痂雖既乾枯其  
 性仍存能珍重蘗藏可以下苗他兒也若夫間  
 有毒痘者則其併感傷寒疫熱而邪熱煎熬  
 之極血液津水舉皆焦燥欲排出之痘液無舟可  
 載無水可送或有舟而無水而無舟何知其能既  
 濟之亨哉遂為紫黑陷平癩疔瘡疹痘丹毒  
 之鼻惡与平素有血毒胎毒食毒父母慾火  
 之遺毒伏藏于血液中与痘液混同到來者  
 是也非痘液素有所挾毒神出鬼沒釀成千  
 萬之奇態異狀也故曰痘者身體固有之靈  
 液而一毫無所挾毒也

元享元年甲子の六月霧蒙して日月あかり四五

月の比長崎湊疫病大に流行して屋毎に病床

に卧して死に至るもの七千余に及

六月友清て  
救金

九及四國中國の方と又疫氣時に行はる是に

死<sub>は</sub>多<sub>し</sub>と<sub>も</sub>六七月難波京師<sub>に</sub>及<sub>び</sub>  
染疫の家<sub>に</sub>苦<sub>し</sub>む<sub>る</sub>愁<sub>ふ</sub>る<sub>も</sub>泉南尤甚<sub>し</sub>  
多<sub>く</sub>境の高家死亡<sub>し</sub>數千人京<sub>を</sub>組<sub>を</sub>定<sub>め</sub>人  
形<sub>を</sub>作<sub>り</sub>夜<sub>に</sub>入<sub>り</sub>數十人金鼓鼓<sub>を</sub>送<sub>は</sub>  
喧<sub>ひ</sub>火<sub>く</sub>前代未<sub>聞</sub>の姿也<sub>關東</sub>と同<sub>じ</sub>様<sub>な</sub>を  
我<sub>存</sub>中<sub>元</sub>の前後床<sub>に</sub>卧<sub>し</sub>醫師藥<sub>匙</sub>を<sub>さ</sub>  
置<sub>時</sub>胎<sub>を</sub>五<sub>方</sub>を<sub>や</sub>て<sub>中</sub>服<sub>し</sub>死  
亡<sub>は</sub>傳<sub>へ</sub>る<sub>勢</sub>及<sub>濃</sub>及<sub>諸</sub>及<sub>東都</sub>同  
く<sub>疫</sub>染<sub>る</sub>ハ<sub>如</sub>古<sub>に</sub>云<sub>ふ</sub>三日<sub>疫</sub>病<sub>と</sub>ハ<sub>可</sub>也<sub>如</sub>

天信景益尾

予<sub>知</sub>已<sub>の中</sub>河豚魚毒<sub>に</sub>ハ<sub>大</sub>發<sub>熱</sub>也<sub>也</sub>

深更<sub>に</sub>成<sub>り</sub>ま<sub>は</sub>医<sub>藥</sub>及<sub>兼</sub>一<sub>た</sub>物<sub>に</sub>公<sub>得</sub>  
胃<sub>有</sub>り<sub>ま</sub>丸<sub>裸</sub>と<sub>ち</sub>土<sub>問</sub>ま<sub>腹</sub>を<sub>冷</sub>せ<sub>ま</sub>  
ま<sub>ハ</sub>次<sub>方</sub>を<sub>焚</sub>氣<sub>を</sub>め<sub>く</sub>平生<sub>体</sub>を<sub>成</sub>く<sub>を</sub>南<sub>人</sub>  
の物語<sub>を</sub>て<sub>也</sub>丹<sub>誓</sub>著<sub>者</sub>聞<sub>集</sub>

因<sub>り</sub>云<sub>播</sub>列<sub>明</sub>石<sub>在</sub>秋<sub>田</sub>村<sub>橋</sub>久<sub>左</sub>衛<sub>門</sub>  
農家<sub>に</sub>眼<sub>を</sub>療<sub>治</sub>ス<sub>也</sub>

ト<sub>云</sub>人<sub>予</sub>に<sub>語</sub>し<sub>云</sub>若<sub>年</sub>の<sub>比</sub>朋友<sub>三人</sub>打<sub>寄</sub>河<sub>豚</sub>魚<sub>を</sub>  
食<sub>す</sub>る<sub>者</sub>人<sub>ハ</sub>更<sub>に</sub>復<sub>然</sub>く<sub>久</sub>右<sub>衛</sub>門<sub>食</sub>後<sub>昼</sub>寐<sub>せ</sub>  
し<sub>ハ</sub>何<sub>と</sub>妙<sub>く</sub>熱<sub>出</sub>若<sub>な</sub>る<sub>ハ</sub>い<sub>て</sub>人<sub>方</sub>形<sub>ハ</sub>自<sub>声</sub>を<sub>出</sub>  
出<sub>さ</sub>る<sub>ハ</sub>と<sub>云</sub>以<sub>て</sub>不<sub>出</sub>眼<sub>を</sub>物<sub>を</sub>視<sub>耳</sub>を<sub>音</sub>と<sub>也</sub>

口よのきる 不能手足を動かさんと云ん共自由あり  
を皆午睡の比故離家する午睡する故知人も  
死く心中滅り四苦八苦すれ共致方死し折節  
下婢午睡覺て其向の小流へ手洗をばしぬ事  
主人の午のおりるを動を不審しと思ひ奉り  
声をうけり子不答友大驚き本家へ走り  
病人皆眼を見へん知り死るを共致方死し折  
死候くと思ふと出づ狼吠數人奉り本屋へ連  
飯と梅を要する村中比日ある色は評義なり  
自分心中と平快ありしを共並に藍汁を飲  
むは治ありと云る聞居るな藍汁を誰のもの  
せ思ふ思ふ共言語出ぬを是れ非あり医師とあり  
脈を見定て平快六ヶ友と云遂に初更の比り  
白衣を打着せ例に通し仙前より主人を尋  
親屬へ知らせ種々相談し寺より庄をよとて米  
を炊き大強部皆耳りて一何れに世に大送  
等ありありおむ笑ふ大刑日前也抄り世に等  
因縁ありを云ふも死或ハ泣き死して色この  
るを話し居る内り一里半許服を病あり  
初更後あり大子驚き兼りて多藍汁を抄り

已有り君一口咽せのうと云々去年子入を扱つて  
 ると思ふや、毒二人共と藍汁位をせと助る  
 子の非近博の医師と皆、手を離さぬ方  
 るし、子死んじと云々毎へ減り、年大  
 死海、子、姉の云々、不應共我等、お角指  
 有る多る者、一口も七年、母の天をせると、社  
 口へ吐き、父、子、弟、予、少、香、夜、思ひ、一生、嫌  
 命、天、吞、吐、り、好、通、り、故、又、海、の、海、を  
 動、出、る、と、吐、き、を、催、吐、り、夫、より  
 一、向、は、不、覺、ち、比、迄、仰、せ、何、の、汚、物、を、吐、く  
 大、低、理、の、始、り、人、事、を、笑、ひ、始、る  
 一、言、わ、く、皆、く、と、ん、と、好、む、夫、より、次、夫、より  
 一、身、が、の、く、減、り、黒、髪、あ、き、位、多、く、喝、く、と  
 実、り、口、の、く、く、き、苦、受、る、と、先、苦、受、る  
 昨、の、方、う、き、と、思、ひ、記、苦、者、あ、り、と  
 苦、く、お、二、更、比、女、と、成、り、尤、医、師  
 子、あ、り、何、の、薬、を、服、せ、又、上、と、り、る、藍、汁  
 を、飲、く、後、あ、る、却、り、覺、え、る、夫、四、日、子  
 ハ、大、低、平、扶、子、あ、り、や、名、所、の、味、く、也、  
 子、全、扶、致、く、と、口、人、名、書、の、子、扶、り、る

嘉永五子年七月晦日奉詔

往後御家より外科の妙手有りし者名を諸侯大夫に  
出入せし或時加列公、彼外科系を所加列侯進  
習の士を招きし、その者見及の通、屈竟事の  
ゆえ先年賊五人の戦、五人共討め、得て彼賊  
より右の手を打落され、早速継ぐ、疾平愈致さ  
其外科系相を智祖歸し、故夫より已来  
右の腕用し不立善代の者あり、得共入不便り  
か、い許ハ外科の妙手、如何を何卒療治して  
手の用は得たり、致度仕得、いあきや、見て後、れど  
宜ハ外科畏く、侍の士のみを、見侍は、成程、口齒  
樂志、マノ、継、方ハ、元早七年、已前、の、る、の、し  
吾、向、友、を、得、る、人、金、存、身、去、直、する、一、向、五、年  
は、近、比、お、多、事、る、し、と、ヤ、セ、ハ、二、冊、候、上  
外科、向、ハ、彼、少、何、得、の、事、マ、テ、命、危、く、り、ハ  
不、若、ク、右、乃、腕、不、叶、得、ハ、早、竟、武、の、役、マ、テ、不、  
空、く、録、を、食、ま、ら、事、ノ、公、外、の、至、よ、な、何、か、事、方  
ら、ハ、遠、也、し、ら、ク、後、及、と、ま、実、面、の、影、れ  
中、故、外科、各、く、其、候、を、去、る、し、如、何、し、と、  
形、事、し、ら、ハ、差、や、為、し、進、止、し、ら、祖、歸、也、

已前の如く、うちが得け、其早年久及、愈々其疾今更も放くゆるる不入変ふれとし共此士不同意是非近く自分少屋へ出希々手に放くる方継承して後と云故殿を扱一座何とも用の由判せりん也維多印放して果ハ用の私幸の夏也者士の一度や出つて幾翻中公社生と故左者ハ幾日の系と約諾して外科志向の由約束の日至彼士の長屋へ行き以ハ早速出立多外科志向を一丁寧々と云衆人と板先日や是は通り共者腕健在在一の後ハ只今如為くやりて板の上へ服差を移くコト亦ハ如為くやりて不変危何とも瘡治移及存と云故外科ハ為すが腕を云々能く健く薬を付くと之調理ぬ彼士初之辱と者の通りハ様様ノと云也原之所種々死走くて床ハ也日を経く元の通りハ小愈有て切り去る已前ハ替へん腕付く自由ノ働くルハ外科の上手事多ク少人感公せりと云又彼士の腕切れ自若として安らちり未如斯也庶氣を不見と件の外科歎美せりと云牧笛類叢書近来南都と云々と云其多取來りて之を信ぜり

卷三

煎く多く病人よの悔くめ又浴せしむるも其  
急病と雖有功本綱附方霍乱煩渴は用るす  
見を梨 理奔隨筆

浪花の難波村大津屋五高と云へる者薬湯を業  
とす船場の何某志をく入湯の爲 此家  
未だ酒客水色ハいつと至る毎に其後酒を進  
むる酒を由は又遅く甚不平也一日未だ  
血を盃を出せむ 餘り取奉る或は身主  
やと尋りし者云予此は早飲の唯唯物  
有る共不下陰く是を吐くは桃の大  
色黒く茶銀石のせある者皆口のせし  
余と乞を乞やと家内の若を呼んせし  
皆此として不進余ちのくは名は勝才也  
怪物有るは多しを余一酒を百身奉  
小浮けて其怪肉の逸へるを余味を  
吸取る速に三杯を余味を  
盃に籠り入せ上を巾子包難波橋を捨  
海より酒を吞るを不持と語る  
席子打つる京板屋権介と云ふの在り  
天明九年の文也西土と是を云ふ者

齊及の長彬と云ふ酒を嗜むるが一夕一物を吐時  
肝の如き塊肉也色蒼々として形蜂の巢の如き微動  
を酒を把て是を沃く啣々として声有彬此物  
吐く後酒を不好と見せし又先年丹那の地  
山子大酒徒有法を犯して刑せし時子願主の  
存酒を好者の腹中の一物有る彼酒を吸夏  
を穿たり彼腹中を搜して見ゆべしと有りしハ  
やがて解体せしよ一寸許の壺の如きものニ有る此  
物形之と酒を沃く一壺二三升を以てせしや

共壺今ナリ有るを木村佐助の諾也 同上

一字医書に圭支一字甘草一字おと之ハ二分五厘の

夏也錢の表ハ心文字四字有る一錢一匁と定  
めきハ二字ハ四匁と二分五厘と形也六匁の  
比より天下金不多有切者を賞するハ錢を用  
せし時字を文ふ久くを多文と之ハ二千若  
錢の表又十万文と之ハ二万五千錢の表也牛若  
ハ脚の敷を以て之を漢書に牧る二百疏孟康注  
五十四  
也師古云疏千牛八百七十二頭也其角と蹄也  
古の蹄の字  
敷と之を如く敷の多く少く様子を考ふるもの

牛海ノ 乃の字ハ篇海類篇十見(をり)侯字



彙補ハ韓退之作ハと云ハ了錢の字ト通ス俗  
字ハ非ス夫山崎先生文會筆録ハ此考有リ曰上

### 白木効

余壯年の比酒を嗜ミ其毒肺を破リ竟政壬寅の  
年初度の比肺癰を憂ヒ其秋の際ニに甚ク中  
秋ニ至リて女ノ冬ノ息ヲ失フ如ク昏肆木村源兵衛  
成者新齊諸一帙を推乃未レ今ニ病床をシて  
聞キルル怪ス天ヲ祀シ書也ニ中ニ蔭秀君  
と云者越東古寺の中ニ一宿史寺中ニ毛莽棺を貯  
べ置リ蔭秀君胆壯ク其の形ハ棺ハあり書ヲ  
讀ミ居ル夜更テ灯忽青ク一の棺自レ用セテ  
紅袍の人出て秀君に謂フ君は名匠也肺癰  
と云ハ人ノ薬ヲや秀君云白木是を治スべ  
其人胸ヲをシ肺臟一具膿血淋漓スを示  
して泣キ曰我此薬ヲをシ不知斯の如クて  
一命ヲをシと云リ秀君扇を以テ是を打ツハ人  
忽不見灯又明ク也と云リ有クを見テ醫師ヲを  
了シ誠ニ言更湯ニ白木を施シ服シ一日ノ  
快ク速ニ快腹ニ趣リ余其後浪花ニ  
客居セ松尾元章と云ハ醫師に具スを語

己多禮ハ元章白朮一味を散とて飲しむ多  
不日に驗を得きりと云ふく雑書かきゆは  
見よとばへきり何れ先人云天下害病の書何  
て益形きの書りよ見者深く思ふべし日上

天癸ハ女子ノ月経ノヤウニ云ト素問上古天真論篇ニ女  
子ハ七歳腎氣盛齒更リ髮長ニ二七而天癸至任  
脉通大衝脉盛月復以時下故有子云云丈夫ハ歳  
腎氣実髮長齒更ニ八腎氣盛天癸至精氣溢  
寫陰陽和故能有子トアリテ玉冰ノ註ニ男女有陰  
陽之質不同天癸有精血之形亦異トイハハ女  
子ニ在テハ血ヲ天癸トイヒ丈夫ニ在テハ精ヲ天癸トイ  
フニ似多共其論未タ盡サズ張介賓ノ類經ニ天癸  
者言天一之陰氣耳其氣化為水因名天癸其在  
人身是謂元陰亦曰元氣人之未生則此氣蘊於  
父母是為先天之元氣第氣之初生真陰甚微及  
其既盛精血乃王故女ハ必二七男必二八而後天癸  
至天癸既至在女子則月復以時下在男子則精  
氣溢寫蓋必陰氣足而後精血化耳陰氣陰  
精譬之雲雨雲者陰精之氣也雨者陰氣之  
精也未有雲霧不布而雨雪至者亦未有雲

霧不濃而而雪足者然則精生於氣而天癸至者其即天一之氣乎ト明白ニ論セリ然レハ淫慾ノ情動クハ俗ニ云色氣ツク時ノ至ルコレ天癸至ルナリ故ニ男女共イフズレ 善庵隨筆

轉矢氣ハ元ノ蔣正子カ山房隨筆ニ三山林觀過年七歲嬉游市中以鬻鬻詩自命或歲令詠轉矢氣云觀之不見名曰希聽之不聞名曰夷不啻口若自其口出人皆掩鼻而過之林曾試神童科不甚達トアリテスカレ屁トスルニ似タリ然レトモ此文ヲ聖氣集ニ令詠洩氣ニ作ル一夕話ニ載スルモ亦同レ洩氣ヲ是トス轉矢氣トスルハ恐クハ非ナラズ

轉矢氣ハ矢氣肛門ニ逼リ外ニ洩レス声響ノ内ニ反轉ス俗ニ屁カヘリト云是也轉矢氣或ハ轉失氣ニ作ル傷寒論辨陽明脈證并治篇ニ轉失氣ノ字ニ見ス宋板及七諸本皆轉失氣ニ作ル玉函

經獨轉矢氣ニ作ル何ニテモ通スレハ轉矢氣ニ作ルヲ文理穩順トス

條弁曰黃氏曰矢漢書作屎古屎矢通傳寫誤續匡說医学全書曰是下焦泄氣俗云去屁也考之篇韻屎矢通用竊恐傳寫之

誤矢為失耳宜從轉矢氣為是且文理頗順  
若以失字則於義為難訓矣舒氏云案矢氣  
二字從前書中皆云失氣此誤也緣矢字誤寫  
出頭耳蓋矢与屎同矢氣者屁乃矢之氣也且  
失字之上立轉字之理轉乃轉運也以其氣由轉  
運而出若果矢下<sub>ハ</sub>夫何轉之有確為矢字無疑  
何<sub>トナレハ</sub>矢氣ハ唯矢ノ氣<sub>ナレハ</sub>即屁ナリ失氣ハ矢氣ノ  
放矢スル<sub>ナレハ</sub>放屁也其放失スヘキ矢氣ノ外ニ洩レスノ  
内ニ轉反スルヲ轉失氣ト云故ニ辨霍乱病脉證  
并治篇ニ似欲大便而反失氣仍不利者此レ  
屬陽明也トアル反矢氣ノ轉失氣ニ同キニテモ轉

反ノ義ナラヲ知ヘシ若此條ノ反ノ字ヲ諸辭トナシテ  
反テ失氣スナド訓セバ反ノ字義不通又辨陽明證  
ノ下文ニ傷寒四五日腹中痛若轉氣下趣小腹者  
此欲自利也トアルハ腹中痛ニ又ハ腹中不痛ク  
轉氣声響<sub>ノ</sub>小腹ニ下リ趣クヲ云腹中ノ<sub>トナレ</sub>  
バ矢氣トモ矢氣トモイハサレ共義ハ同キ也同上

熊經道引スルコトヲ熊經ト云ハ莊子ニ吹呶呼吸吐故者  
之所好也<sub>ト</sub>淮南子ニ如鳴之好声熊之好<sub>ト</sub>經<sub>ト</sub>  
云ル如<sub>ク</sub>熊ハ經ヲ好モノ故名ケシニテ後漢書華

陀傳古之仙者為導引之友能經鳩顧引挽  
腰體動諸關節以求難老註熊經若能之攀  
枝自懸下誰能知ルコトナレ共雲笈七籤漢時  
有道士君借者為導引之術作猿經鷄顧引挽  
腰體動諸關節以求難老ト猿經字奇ナラヤ  
同上  
眼ノ性ヲ養フ十訓

一淫二酒三陽四尸五行六音七苦八風九白十細  
侍医ト云ハ當時ト云ハカサカト云ハ類ト云ハ天子の

御前ニ侍リテ居ル医師ト云ハ侍医ハ職負令又  
職原ハ女ハト云ハ不見ハ侍医ハ地丁ト云ハ得共半  
職原ハ女ハト云ハ不見ハ侍医ハ地丁ト云ハ得共半  
申シ之の小板友と昇て侍候 闇有隨筆

俗子怒物食ト云ハ常人の不食物ヲ食テ人誇者有  
益益の戯好リ昔仙臺の政宗猛將好リト勇氣  
の餘ト云ハ何某好リ者ト云ハ物喰ト云ハ政宗と挑  
人有リ一日政宗彼人の宅ニ行キテ鼠の赤子を濃  
味醬汁ニ煮テ進メキル政宗賞美ト云ハ  
食キテ飯宅ト云ハ大食傷ト云ハ既ニ死ニ至ラ  
人トセリト云ハ其家中の医高屋喜庵ト云ハ其  
毒丹ト云ハ家方の消毒丹ヲ進メ死ヲ救ヒ人命ヲ

全くせむせむ其賞り喜庵へ祿千石を賜ひし  
其子孫今も有り祿も不減昔の如し云 同上

大槻先生三不治 仙臺大槻茂貞

賤者病不盡治 豪家病不順治

尊貴病不決治 夢の代子見きり

但馬城崎湯嶋医黒崎氏治勞篇

罹此病而死者四焉医殺之也医書殺之也自求

死也雜戚殺之也医謂脉數咳嗽所謂勞療不

可治之症也是医殺之也古今医書皆謂虛損勞

療因名謬治也是書殺之也疼咳不愈則親戚

怖之日嗚呼勞療也是親戚殺之也患人聽医师

親戚之言自分以為終不可起也是自求死也 同上

月經 醇生菴產育全書抄嘉永三年上梓近江八幡水原義博濟卿著

一名月 神農本經 經汁血 全上 月夏 素問

地道 全上 經 灵柩 經水 傷寒論

經候 金匱 月水 全上 月信 全上

月使 全上 丹 同上 經脉 同上

姘 說文 汚 同上 姘寢 漢律

所辟 史記 玄的 史記索隱引王粲神女賦以為丹的五已并其偽姑記備參考

陳繼儒書蕉玄的 菟文類聚作萃的 月浣 候論 月候 全上

潮信 外臺秘要 入月 王建宮詞 月客 神仙食經

月候血 聖惠方 經信 婦食方 血經 全上

經行 同上 經道 全上 真種子 悟真篇

經血 聖濟總錄 月脈 同上 經氣 全上

月行 醫說 血脈 衛生易簡方 血氣 壽域神方

月家 普濟方 月露 證類本草 月華水 若見律

血水 毘婆沙論 月期華水 四分律 紅潮 粧樓記

桃花期水 全上 金水 準繩 落紅 全上

經夏 証治要訣 丹的 留青月札 經血氣 証治準繩

紅脈 全上 信 醫學綱目 月汛 赤水玄珠

汗期 全上 癸水 全上 古今醫統 月潮 全上

紅鉛 本綱 水中金 本草原始 癸 全上 補癸水 文林廣記

紅 同上 臧 篇海類篇 不淨 全上

程姬交疾 屈雜俎 月漏 崔氏骨蒸 血信 產室

紅官人 金陵六院市語 紅漏 董氏集驗方 月運 言籍

月水汁 本草集要 月經水 本草蒙生 月家病 本綱附方

月隔五淋 本綱附方 崔氏補 血氣 同上 陰分之下 醫便

童女初行經水謂之首經 悟真篇

一名 金華 參同契 精仙 楞嚴經 先天紅鉛 本綱

首鉛 本草原始 金鉛 全上 天癸水至 壽世保元

乳汁

乳。漣。爛。或作奶。妳。妳。並同。或妳俗作慙。穀左傳又正

字通穀。俗作穀。集韻作穀。乳。乳。穀亦穀。總要作乳。並泥省作穀。以穀為穀。尤非。

乳汁名醫別錄 妳汁本綱 仙人酒全上

人精秘方集驗 蟠桃酒願休廣類 奶雨脚診正音

白砒遵生八牋 真鉛全 妳子訓蒙復會

生人血本州狀名註 白硃砂全 忌妳同

仙家酒日上附方 陰丹正字通 蟠桃飲物理識

乳 乳字彙囊末切楚人謂乳為肥 穀同上

胞

素問五藏別論評熱病論篇氣厥論奇病論篇

靈樞水脹篇五音五味篇及莊子外物篇漢書東

方朔傳所稱并皆曰子宮○按通雅云包从象子

在胞中是也然則其或為膀胱為心包者皆假借者

非正義也

腸吳樞水脹篇及後世推腸為子宮處 吳樞五色篇

血室傷寒論 子宮始見神農本草經紫石英條 子戶脉經

胞門同上 胞藏病源候論 兕生囊說文



兒生處 全上

產舍 外臺

宮臟 百選方

本經 全上

胞室 婦人良方

胎宮 聖濟總錄

子腸 全上

盲腸 全上

胞胎 全上

血海 同上

赤海 顧願經原

血藏 周頰產室方

生腸 熊氏婦人良方

陰腸 徐氏胎產

胞戶 瘡瘍大全書

產腸 得效方

胎藏 三因方

胎舍 菩薩處胎經

赤宮 蘭室秘藏

紫子 通志六書畧云

子房 万病回春

鳳凰靈臺 全上 元宮 易簡方

陰胞 吳崑素問

胞室 傷寒六書

胎室 蠡海集

室 名醫類案

中宮 悟真篇土金 全上

華也 全上

胎胞 同上

蘭田 石室秘錄

蘭室 全上

子胞 赤水玄珠

胎亮 毓徐璘痘疹

牡屋 如意君傳

桃源 蠡斯集

陰宮 祝允明猥談

內宮 昭陽趣夏

子門 靈柩以下

子藏 神農本草

子陰 病源候論

產宮 外臺

胎臟 三因方

胞胎 千金方

本臟 百選方

子室 程氏匡說

大中極 鍼灸資生經

安胎宮 赤水玄珠

產補

胞衣

胞 病源候論

衣 同上

胎衣 隋書

人胞 本綱

混沌皮 古今醫統

紫華車 同上

子衣 隋書

兒衣 本草拾遺

兒胞 景岳全書

仙袈裟 儒門要親

混衣毼 五雜俎

混沌衣 本綱

胎產衣 本綱

仙人衣 同上

混元衣 回春

胎臍 御診正音

混元母 本草蒙筌

河車 集驗方

紫河車 同上

衣胞 五雜俎

天元一氣 集驗方謂首生男休者

乳汁ノ説古今紛々トシテ其説不一脈經云下主月水上有

乳汁千金云凡乳母者其血氣為乳汁也本夏方

云婦人未受孕則下行之以為月既妊娠則中益之以養胎及已產則上壅之以為乳皆血也濟陰方

云夫衝任之脈為經絡之海皆起胞內心小腸二

經上為乳汁下為月水以上並乳ヲ以直ニ血トナセリ

然ト雖今コレヲ諦カニスルニ乳ト血トハ色味共ニ隔然ト

シテ相似サレバ其説ノ取ルニ足サル莫自ヲ知ヘシ和蘭

一説ニ乳一種脂肪而所以養兒之液也此混合血中

之乳糜借血運行一周而至孺因其許多濾胞及

細管諸器之機轉分泌而成者也トコノ説モ亦信

用シ難シ何トナレハ今芽兒未タ飲食スルトナク唯乳汁

ノミ吮ムモノニ於テ其糞質復テ見ニ滑便ニシテ淡シク之

ヲ水ニ投スレハ則チ浮ブ其米粥汁等ヲ以テ養育スル  
所見ノ糞質ハ粘滑ニシテ亦水ニ投シ驗ルニ則チ沈ム  
也夫レ糞ハ飲食ノ滓渣ナリ若シ乳汁ヲシテ果メ血  
中分泌ノ物トナスキハ彼ノ濾過精密ノ乳中山豆ヲ  
過多ノ滓渣至濁アルトテ得ルモノナラシヤ又云乳者  
飲食諸物化熟之乳糜存其本性而不和血此  
直自乳糜管所觀附數岐細小管与乳糜槽  
所分出無數細囊小管輸送而速入于腸者也  
トコノ說稍得多ト雖乳糜ハ血液ノ原酪ニシテ已ニ  
濾胞緻密ナル濾過ヲ經ルモノナレハ決シテ至滓アルモノ  
ニ非ス且夫乳糜ノ量ハ僅ニ一身ヲ潤沢スルノ血液  
ニ給スル者ニテ日夜ニ滲濾スル所幾クモアル夏ナシ乳汁  
ノ量ニ至テハヨク乳汁ノ涌出ル者ノ乳汁ヲ絞リ試ルニ  
大率一昼夜五六合ニ過クシカルキハ亦豈彼ノ僅々  
ル乳糜中安ゾ此過多ノ乳汁ヲ分出スルトテ得ヘケン  
ヤ今又試ニ乳汁ヲ取是ヲ罍ニ貯ルニ至滓乍チ罍底  
ニ凝滯シ其質ハ精密ナルモノナラス況ヤ飲食胃ニ入  
ル時ハ則チ乳房乍起脹シ來リ且ツ喫スル所ノ菓食香  
臭ニ隨テ速ニ乳性ヲ衰ルヲ以テ之ヲ觀レハ其隧道  
未詳ニセズト雖乳汁ハ是必乳糜諸管ヲ經ル

者ニシテ腸胃爛然ノ後直ニ乳嘴ニ達スルモノト知ル也  
此境實ニ肉眼ノ觀得スヘキ所ナラズ今テニノ徵ヲ舉  
近江屋某妻妊娠セリ然ルニ乳兒ノ未切ケレハ其乳  
ニ離レ音シ唯カラシ夏ヲ夏テ潛ニ破胎菜ヲ服セリ  
然レ凡胎兒ハ傷胎ノ様子モ不見シテ却テ其毒母  
及乳兒ニ及シテ大ニ苦悩セシ也又某兒青糞ヲ下ニ  
因テ治ヲ請フ予コレヲ診スルニ吳狀ナシ由テ飲食物ヲ  
色々ト尋子問ヒシニ折カラフ新茶炮製ノ時節ニテ之  
ヲ喫セル由ナリ巖ニ其夏ヲ禁セシムレハ藥ヲ与ヘズシテ

頭ニ愈

外ニニ余畧シテ不攷

此ヲ以テ考ル時ハ飲食能毒ハ勿論其色追モ其一ノ兒  
体ニ達スレハ乳汁ハ必濾胞精密ノ部ヲ經ル者ニアリテ  
ル夏自的知スヘシ故ニ又能是ヲ推シ兒母一体ノ理ヲ知ル  
時ハ則母ノ飲食藥物ノ禁忌喜怒哀怒嬉怒ノ夏件ニ  
至ル追當ニ嚴ニ之ヲ警言ノ之ヲ慎テ以テ患ヲ兒胎ニ傳  
ル夏ナカルベシ

### 兒枕痛

産後忽々腹結脹陣疼ヲナシ或ハ二日ノ後是ヲ発  
スル者兒枕痛ト名ク蓋新産子宮腫脹未ク斂縮  
ヲ不得カ故ニ小腹結痛ニテ塊アルカ如シ真ニ塊ア

ルニ非ナリ但其陣疼スルハ子宮徐ク斂ニトシテ蓄  
瘀ヲ絞リ去ニトスルヨリ此疼ヲ発スルナリ此証初孕  
ノ者ニ稀テ経産ノ婦ニ多シ又敗血久ク留滯凝著  
スルニ因テ性々血片血塊等ヲ下スモ亦アリ俗間コレヲ佳  
兆トナスト雖敢テ然ルニモ非ス但新産僅ニ見枕ノ候  
アルモノハ敗血上逆昏暈等ノ患ナクシテ佳ナリトス治  
方桂枝茯苓丸料加延胡索牽牛子或ハ聖惠牛膝  
散ノ類撰用スヘシ瘀去リ宮斂レハ自愈ユ又平素疝  
癥ヲ患ルノ婦新産瘀血ト相摩軋ノ疼痛ヲ為テ  
アリ治方八正湯加附子ノ類撰用スヘシ味山查煎モ  
亦効アリ

見枕痛 婦人良方 一名乳癥 神農本草經 癥痛 病源侯論

血癥痛 全上 血癥 千金方 癥 婦人良方

見枕脹痛 同上 産枕痛 医学綱目 血枕 同上

血母塊痛 本州 見枕氣痛 全上 見枕疼 衛生易簡方

見枕疼痛 倉生司命 見枕骨疼 奇方類篇 見枕塊 女科撮要

嫁母痛 証治要訣 癥母塊痛 医学正傳

三角登壽院法印了敬語予曰性歳浪花名豪鴻池某  
買一妓為別房後举一子而主人俄死家取其子養

之妾乞剃髮而奉香華家善其志買草菴於南  
郊居之厚給衣食有年矣偶經閑數月吐逆惡  
食懈惰腹滿證候酷類阻病延醫診之皆以為懷  
身於是衆悟有奸竊議族免身而放逐焉比八月俄  
腰肢墜疼陣痛亟求一同催生頃之微見血蟻次下  
白塊如雞蛋大者十餘枚腹復故先是家遣苗暱  
老媪視病且囑探其狀媪語次及其夏尼密語曰初  
妾未此地未幾偶於庭際見一狸狐居無聊悞其侮  
誑時夕投殘飯慰其意日久為常晝夜未馴時適  
冬天邪寒致乳毒其夜凍令其入室近戶臥遂至  
同床而寐恍惚之際不覺相狎爾後患狀覺有身  
深慙為非類所投胎懊悔百端幸不成形僅免  
受畜生道之苦駢差之至懺悔以消前罪云  
劣齊云平安奧道一產科也有身之初有心惡氣塞嘔吐擇食

等證名

惡阻病病原候論一名惡食全上惡字全上

子病婦人良方阻病千金方選飯婦人良方

擇食儒門事親惡子產室百問病鬼証治要訣

病膈寓意草阻脈經

有身後月信未胎尚无恙

盛胎 医学正傳

垢胎 本綱

狗兒胎 李笠翁一家言

孕婦兩脚浮腫不化者

雞脚 三因方

脆脚 赤水玄珠

子氣 丹臺玉案

通身腫滿心腹膨脹者

子腫 入門

胎氣 同上

胎腫 同上

子滿 医統

琉璃胎 明医指掌

婦人妊中時有水浮名該水 医学入門

一名非時狐漿 丹臺玉案

子癩 病源候論

一名瘰

子冒 同上

子癩病 外臺

風痙 同上

子癩風 普渡慈航

兒暈 入門

試痛

試胎 便產須知

弄痛 百効全書

轉胎 保產心法

痛胎 医通

弄胎 丹臺玉案

試月 百効全書

小產

一名傷胎 金匱

半產 全上

傷娠 三因志

半產 脉經

墮傷 同上

傷墮 病源候論

墮胎 千金方

損娠 外臺

落胎 全上

墮娠 古今錄驗

傷產 十產論

墜胎 婦人良方

傷胎 全上

損胎 医宗金鑑

漏胎 普渡慈航

乳母 史記張丞相傳 和名ムハ古名ナラモ 日本神代記後世ノト和名扱  
又摩々東鑑

一名母 國語 妳媪 五雜俎 妳母 同上

大乳母 史記滑稽傳 奶娘 舜水談詩 養娘 俗記聞

○戴白生 婦人良方 兒生レテ頭面及偏身白屑ヲ粉敷スルカ  
如モノ

戴髮生 廣嗣記昂一名也

○順產 脉論懷身背面倒首 正產 十産論 大産 女科撮要

逆產 脚ヲ出モノ 寤生 左傳 倒産 十産論 還生 通雅

踏蓮花生 四春 脚踏蓮花生 達生編

坐産 十産論 露スモノ 坐生 医統 生醫生 医通

横産 横ニ僵ル者 後横生 千金 横生 聖惠方

討鹽生 達生論 手膈 露ス者 覓鹽生 丹方彙編

棖後 保産核要 見頭仰 棖後産 保産 心法

偏産 左右ニ偏處ス者 側産 入門

礙産 十産論 医学綱目 燥屎妨碍者 曰碍産 産 論後之胎帶其肩ヲ絆フ者

背包生 医通 帶其頸項ヲ 盤西スルモノ

浪脐生 全上脚胞衣ヲ踏テ 脐腸出ル者 盤腸生 十産論 子宮但 盤腸生産 普渡 慈航 脱花生 奚囊便方

盤腸生 十産論 子宮但 盤腸生産 普渡 慈航 脱花生 奚囊便方

盤腸獻花生 濟陰綱目 肉胞 全上 肉團 續博 物志

毬生 羅主尖文集 胞膜ヲ 不脱ニテ産ル者 肉胞 搜神大全



明産

既ニ形ヲ成モノ半産全上

暗産

半産未胎ヲ成サルモノ全上

半生 脉経

胎墮

病源

破胎

菜劑ヲ以胎ヲ破モノ神農本草

墮子 全上

換産

十産論 冥天換時ニ産ルモノ

凍産

十産論 冬月冥時ニ産ルモノ

驚生

金鑑 傍人擾々婦為ニ驚動セラルモノ

夢生

体仁彙編 生レテ声ヲ不放ラ

悶寂生物 物小識

夢胎 彙聚單方

草迷

推拿秘法

草寐

清周亮工書影

臥胞生

同上見 神録

賀川傳書云乳ニ三品有其状 椀ヲ覆スル如ク兩乳間

一指ヲ入ル者是ヲ大サレト云乳房小ニレテ三指ヲ容ルモノ小サレト云大サレハ初生飲尽ス一不能故其月

ナト腐敗スル復有小サレハ乳汁多ク且止ム一早シ

中サレニレテ乳汁薄ク色白キ者ヲ上品トス

雙生

公年昭十二年

一名 孿

説文

孿子 戰國策

兩胎

後漢華佗傳

孖

六書略

駢胎

褚氏遺音 二胎

病源

孖生

五雜俎

孿生

槐西雜誌

劣齋又補

二子 關尹子 二人 國語 孿生子 淮南子

双胎 脉經 双軀 全上 双姓 全上

二胎 全上 双娠 名匠指掌 双論 語義疏

兩子 南史 兩兒 全上 二兒 南齊書

双懷 三因方 双生子 候齋錄 孳產 一切經音義

駢胎子 小補韻會 顛 博雅 匹 全上

健顛 集韻 滋 字彙 贅孿子 正字通

贅孿 玉篇 孳 廣雅 重生 太玄經注

双子 癸辛雜志 兩箇兒 詠訣 一雙女 全上

並產齊又補

雙胎 傳子 雙胎 雙胎

雙姓二胎 全上 駢胎 褚氏遺音 枚孿 字彙

孿 正字通 孿生子 潛確類書 雙生子 候齋錄

雙懷二胎 三因方

以上產育全書略按以下並產齊贅言

任子 素問云婦人于女陰脉動甚者任子也

姓子 靈柩云女子于女陰脉動者姓子也 重身 三因方云夫姓娠謂之重身

姪子 甲乙經云診女子于女陰脉動甚者姪子 懷 素問云上為引如懷

懷子 靈柩云至其成如懷子之狀 孕 尚書云劓剔孕婦

胎孕 素問云歲有胎孕不生育治之不全 震 詩大雅云載震載夙

懷胎 昭公元年杜註

身 詩大雅云大任有身生此文  
王毛詩云身重也

懷孕 漢書劉屈氂傳云重馬  
傷耗而古音重謂懷孕也

重 同上

娠 左氏傳云右者方娠  
杜註云娠懷身也

懷身 見上

羸 管子云春音羸音

媼 管子媼婦不銷弃  
古孕字

懷朧 復言要言引家語云顏子  
懷朧十一月生孔子

媼 大玄經云好媼惡媼

壬 說文壬象人裹衣之形

裹子 說文云象裹衣子咳  
夕之形 亥字下

裒 字典

裹孕 法勝阿毗曇論

妊娠 金匱食無寒熱  
名妊娠

懷娠 脉經云懷娠者不可灸  
刺其經必墮胎

懷妊 金匱云婦人懷妊  
腹中疔痛

脈胎 王充論衡云毒篇云口  
齒射人則脈胎墮而創

軀 脉經云乳後三月有所見後三月  
未脈無所見此便軀

軀 軀或作龐

軀 軀字之謬

軀 正字通云俗軀字集  
韻或作龐軀泥

懷軀 脉經云婦人懷軀六月  
七月暴下斗飲水

懷軀 脉經云數月懷軀  
猶未覺

孕重 說苑云不殺孕重者

姦 續字彙補云姦与姦同

胎婦 脉經云三部沈正等無  
疑尺內不正真胎婦

乳子 脉經云脉平而虛  
者乳子法也

腫 字彙云婦人娠也

媼 說文云媼人妊身也

勻 正字通孕字註云六  
書故作勻

孕 正字通集韻作孕

孕 文子云音孕不殺

孕 正字通云訂正篇篇海  
乃部作孕孕並非

嫖 又云俗孕字

孕 見上

羸 又云俗羸字

孺 康熙字典孺字下云又孺遇切  
同孺婦人妊娠也

孺 又鉏救切同孺同義

身 字彙云同娠

身 廣東新語云免身

帶胎 學符全編云今歲閑黎  
又帶胎失門尼姑詩

躄 康熙字典云字彙補  
与孕同

身 續字彙補云身而甚  
切音姓義同

衷 又云全亦借為刺壬字  
任去志別作姓

孕 禮記云毛者孕鬻

孕 漢書云孕毓根枝而吉曰毓  
字与育同核亦孕字也

孕育 後漢書云后既無子潛懷  
恚忌每宮人孕育鮮得金者

孕身 字典謂字註云訖文  
孕身也

意 又云意之字訖病子  
在娘謂之意

安 字彙云婦人病胎  
正字通云同婦俗字

繩 韻會小補孕字註  
云通作繩

雙身 儒門支親云雙身  
大小便不利

娠子 婦人良方

娠妊 廣嗣紀要

懷任 前漢書云懷任於壬

任身 又云任身十四月而生

妊身 異苑云長山趙宣母  
云俗字

妊 正字通云同胚

孕妊 達生編

抱 字彙云孕也正字通云  
抱者作抱

孳 又云初孕也

殆 字典云婦孕也

身重 衆如謂云夫人夢自知  
身重云

有胎 脉經云婦人有胎腹  
痛

有軀 又云婦人經自斷而  
有軀

有體 脉訣云血王氣衰症  
有體

裏子 前漢書云元延二年裏  
子其十月乳

有觀 廣東新語云廣列謂  
婦人娠者曰觀嘉

在身 前漢書云男方在身時王  
夫人夢曰入其懷

胎妊 景岳全書云忽受胎妊  
則衝任上壅

胎妊 千金方求子論及產  
室方論

懷胎妊 同上

任 漢書云李親任  
政君在身

厚 字彙補云音羨其孕同

姪孕 本草方云姪孕五七月

懷胎妊孕 外臺求子論

任孕

廣雅云孕身也謂任孕子也

任

唐鄭氏女考經云古者婦人任子也

有娠

漢書云已而有娠

妊身

百緣經云胎既妊身身又不如

挾

千金方四石湯條

胎娠

明醫指掌云凡胎娠聚疾必先以安胎為主

胎息

證治準繩

子孕

古今醫統女人寒女熱多人無子孕

有事

通雅引神仙服食經曰婦人十五已上下為月客有夏

含胎

異苑云俗忌含胎入

身孕

便產須知云月日避忌之方犯之主損身孕

胎氣

準繩云婦人胎氣有無

兩身

準繩云婦人三兩月月經不行疑是兩身却疑血滯

結胎

抱朴子云受氣結胎各有是宿

姙胎

準繩婦人姙胎腹脹

妊娠孕

名醫類案十一引濟生方

任娠

後漢書云時王美人任娠

抱音

產室方周頴序云有血藏而抱音

身重

通雅云婦人懷孕白有

六甲

黎居士問易方云婦人始

胎

物類小書云曰心脈重也豈大肝脈滑而兩尺甚者胎也

抱

類經云抱者懷胎之義如西北稱伏雞為抱者是也

懷妊

本草蒙筭云懷妊娠食之生子項短

臛

說文婦始孕臛光也

含孕

陶埴遺金術云金為水母母隱子胎水者金子子藏母胞此言金水自相含孕韞積於母中須造化而生

隱

見上

負娠

類林云河南村中有一婦人負娠以疾近

感妊

夷堅志云許回妻氏感妊以未閱十三箇月未得脫身

有孕

夷堅云已而有孕十月免身

孕字

太玄經為多子註云物孕字也

抱孕

趙氏匡貫云婦人抱孕以和氣為主

妊媯

胤產全書養胎類有妊媯諸月針灸忌

養孕

鐘離權靈寶昇法云如婦之養孕龍之養珠

胎胞

二仙傳道集云肺液為胎胞含龍虎保送黃庭之中

病兒

李廷翁一家言詩集云是病血非病兒也

坐娠

辨証錄云婦人坐娠數十日經未者正坐於受胎而彼墮非外因之傷乃精契之自難存養也

孕娠

溫疫論云凡孕子娠時疫云云

妊體

昭陽趣史云妊體之初保絳且厚

妊身 蘭室秘藏云女子如妊身

娠孕 便產須知云娠為子曾虛氣逆嘔吐不食

身懷 本綱玄明粉下

胎懷 類經云胎懷九月見體已長

娠身 綱鑑指南云娠身十月四月而生子

穩婆

收生婦 述異記

收生媪 名山藏朱裳傳云收生媪至以為傭

收生者 格致餘論云常見尿胞因收生者不謹以致破損而得淋瀝病遂為瘡發

收生之母 丹溪心法附錄小兒門云况收生之母不明通氣之大理不知斷胎之細切

收生婆 無冤錄云婦人有胎孕不明致死者檢驗後勤收生婆驗腹內委實有無胎孕

穩媪 儒門事親

媪 同上

又產媪 同上

產媪 經國大典云產媪按生婆問之接生婆

洗母 醫學入門云洗母輕手徐々推兒

洗娘 同上云徐々推上任洗娘

乳媪 五雜俎云產蓐之家防之如仇惟有無賴乳媪云

混婆 丹溪纂要云

司命 名物方言收生婆曰司命穩婆

助產 楓窗小牘云助產朱

老成穩婆 景岳全書

能事穩婆 切、集成

年高歷練生婆 同上

手輕的穩婆 西遊記

村媪 儒門事親

暗練穩婆 願休集

有仁知事穩婆

證治準繩引薛云凡孕家宜預請有仁心知事穩婆常以思結其心先典

說知婦科撮要作宜預請穩婆有仁心識見者

年高有識穩婆 醫學正傳

收生之婦 產生篇

愚蠢穩婆 兇惡穩婆 兇婦 保産様要

収生之婦 達生編 収生 證治大要

有力穩婆 二便云亦治横生逆生仍將本婦手足爪甲炒黃為末酒下一匕更令有力穩婆將産婦

抱起將竹筒從心上走下如此數次即下

手快穩婆

明医指掌云小兒初生下口中尚含胎血如有手快穩婆隨即以手幹出口中血無宿

汁此胎毒用拭穢法

老誠穩婆 保産心法 無知穩婆 同上

老練穩婆 同上 年高性知善婆 産音室度集

年高性善老娘 三因方 昏愚嫗老 女科切要

巧戶穩婆 同上 粗俗穩婆 廣嗣紀要

善熟穩婆 女科切要

仁齋先生の痢を疾く物故せしれり其時誰か

有え一人の医為薬湯を用ひたり其頃の評判

子致撃手子過きりと云へり今を以見きハ药

の如きハ平和の劑あり其時第ハこの評有り

こと也其後後藤九市軍人古方を唱へ

る醫道一変一人一家言を立門戸を張ふ故

り今在るハ古方を不好人と大黄石膏を恐

怖く人無 函散餘録

京師醫學傳未 昭代に至り初ノ素門 靈樞を講

出る人形ありし 慶長庭東菴首とて素難を講

其門人味岡三伯に至り愈盛あり三伯の高

弟井原道潤浅井周伯小川和菴岡本一抱子

四人有 同上

加藤清正の醫師 名不知 高麗陣の時より水土より

習ふ正気散の方劑然ばへし其物を用

意して渡りし案あり皆煩ふ復有りし

不換金正気散を服せしむる其驗あり彼

諸症皆速癒あり 我々の病相同一人は驗有

り先薬をふりし五処より驗有爰に於て其

他の者共ありし悉く皆其功有り其言を

問は香換散也且つ故を問は陣中より醫を兼

ちる故也と云 紳書

或人酒を飲り青面色あり者と赤面色あり

人と有り如何あり復あり也 此復諸書に在る

和述の醫學弁解に有酒を吞り朱顔あり

者其人心気微也又青く成ば肝気微也と云

予此辨に疑有り夫酒を吞り酔あり人



子ハ九人ハ等夷ヲシナバて同ク俗謠ヲ赤キハ酒ノ科ヲ  
之ヲ諷ハ然キハ醜ク形ハ諸人ノ常也又稀青ク  
くハ是ハ変也然ハ心ノ微ト云時ハ世界  
の人ハ皆心氣微形ハ不審想ハ酒脾胃ノ  
入ク其薰蒸ノ氣ヲ肺ノ受ク肺ノ心ノ傳  
心胞其薰蒸ノ温補之ヲ肝ノ受ク肝ノ心ノ傳  
心臟ノ色ヲ外ノ頭ノ朱顔と成或ハ醉ノ至ハ  
又稀青ク成者ハ其人生質肝氣旺ノ友ノ  
彼肺ノ受ク酒氣ヲ肝火へ多ク奪ハ之ヲ以  
肝臟ノ色ヲ頭ノ青顔と成心氣ハ傳ル心ノ  
衛ノ故醉ノ事ト亦微也古来ハ青下之也

云者ハ壯ハ是等をハ陀ノ介陀平ハ人ト号セ也  
やト辨之不能ト去武勇雜談集

或ヤ人トあキ御方御方藥遊をセ折節多ク  
ハ唐人ノ傳ハ一岳價ノ寶ト云ハ藥之  
海ノ數ノ多ク猶ハ芽知度形ト  
の五臟ヲ平ノ形ノ  
申セ子丹と云法目用キ陰ハ草

醫師ハ其志程ハ夫ノ一ハ也

坐人の面を破りて之を愈成形此と左有る医  
ハ稀ありし其若時武藏子在望しに  
其比ハ人參を利する薬甚稀也若人參  
と用ふる医有せハ下手也と云へ世の人參の  
効有復を不知と云杉某と云へる医者ハ其  
少語りし其後李士材蘭馬輿船と云へる  
方書せり行方此比子至りてハ輕き病を  
人參を用ひしる医少一人參を不用医有ハ  
下手也と云へり又武藏り杉某子逢り

又世の人參の害有復を不知と語りて其  
のハ憂ふ除景山通介也と云言りて是を

ハ見識有る世のハやと云へり不後我る遠と  
り禮 多和禮具他

乳の子痼気の女の血の道りハ医の方書を考て  
と云る薬をり世の人の家傳を云へる也世教  
薬ハ我りて云へる人 同上

唐人の物語りハ毒蛇乃咬きりてハ早速汁  
乃筒を結おし筒ハ毒を吸い筒の少ハ  
腫起りて利刀を切り除きを疼  
收く皮ハ切りて云 同上

唐國の醫を乞ふ人毎一妙事と云ふ非を拙し

多しと云ふ脈を去り薬を用ゆ是此國の醫

子凌ひく委交梅子覚ゆ病しる薬一色よ

て下を得る夏有是を此國の医ハ單方也と云

笑へと許胤宗云之華を見せハさハ有まじ一上

許胤宗云古之上医病与薬值唯用一物攻之

今以情度病多其物以幸有切譬猶不知

兔廣絡原野冀一人之獲術亦疎矣名州

越前有乳馭荒乳山の也ナリの馬夫孫市と云へ者有

其母同國縣凡八月至比右の腋下の

小瘡矣後ハ大腫きて疼甚く孫市江及

大浦子行て瘍醫を乞く伴ひ来り診せし

医云是瘡也切りてをさすバ不可治とて彼瘡を

きり膿血大ホカシ逆カり流ま其創口より赤子の頭

見へるを医大ホカシ驚き周章し何共不言逃

行り孫市と譽るいあやし如何とせん

如く只何きれ在し如此して止へき夏如く

初を先赤子を引かすんる女子を己先

て有る然る其母と恙如く瘡も又不日子愈

きく其也子住ふ谷口某數年の後此るを安大  
子奇也とて行く其夫婦子逢ひ夏のよきを尋  
聞且乞ふ其妻の腋下を見肉といはく瘡痕  
を不見谷口某京よ来り一時語るきく吉  
田某又多し語る也 洞度雜談 梅花中村士敷著

大坂近き何と云村に住ふ一医者某不学拙技甚る  
まの如きと云るもき里の幅幅ぬり或年の安  
霍乱疾りまのを療し直に快腹をさしめり  
一村は多りて奇也と稱誉を大坂に其医者親

彼如何なる薬を授け速に驗有りやと不

審思ひ行く其医案を問ひ拙医意氣揚と

云ふ谷に其名匠に能病をいれんを知りて夫に

相應し薬を以て療むる故に不治と云夏を

彼霍乱といふ病は鶴舞と云きて甚る如度

病也此の故に我屠蘇散を与へる是又

新年の祝の用に殊に目出度薬ある故相應し

て忽ち愈せし也と矜色十分にして言へばを

問へば人亦倒れへくたしきを堪忍び腹を

捧へくもを傷りて有人語るも同上

廣沢先生傳子槐木を藍子作りて齒を磨て其合  
ちろを以て眼を洗へ良といひて之を鳳岡先生ハ

試をうと其法 吳詭匿

槐木の皮木木子金へ入て煎せ他木を段々木を細

く折て煎て折て煎せぬハ変て藍と云ふ廣

沢先生何ぞ方書て見出給ゆ取て日上

按煎燈新詔云方書云老鼠老槐皆虛星精故

鼠能視凡人久服槐子可夜讀書

書影云唐開元錢燒之有水銀出可治小兒急驚風

本草綱目ニ直指方ヲ引元錢ヲ燒テ珠子ヲ取ニ漫脚

風ヲ治スル方有リ梅ルニ西土ノ錢鉛錫ヲ雜ル夏ハ見ユレ

凡水銀ヲ入夏ヲ不聞今試ニ西土ノ諸錢ヲ燒ニ珠子ノ

出アルナシ是水銀ニ非スニテ鉛粉ナレシ

真字ノ至和通宝煙多シテ其煙リ物ニ着テ木綿

ノ如シ鉛多入タル故ニヤ 全上

痘瘡ハ上古日本ニ在リナシ中世ヨリ発ス今世ニテモ在國有テ見

ト実ニ古ハ無ナレシ藤原武智磨五十八歳痘ヲ患テ薨

シ房前公五十七歳宇合公四十四歳疫ヲ患テ薨ス是等ハ  
貴顯ノ人々也民間ハ前ヨリ有レシ其疫ト云モノモ亦実ノ

病傷寒ノ類ニヤハ疹瘡病ノ類ナリヤ是未可知大抵  
通シテ疫ト云モノナラズ痘ハヨリテ来ル夏久シ何モ此類奇病  
ニレテスヘテ胎毒ヨリ因ト云痘疹ニ生ニ固ニ限ルコトモ亦未審也  
發ルヤ氣候ヲ以テ夫ヨリ傳染ヲ以テ大抵日數ニ定有輕  
キハ早ク重キハ遲シ虫術ニ種痘ノ法アリ輕痘ノ血ヲ取テ小兒  
ノ腕ヲ痲シテ入ル也又痘ノ聲ヲ粉ニシテ小兒ノ鼻ニ入ルヲ忽  
傳發スルコト有リテカロシト云然レ凡好ニテ為スヘキ夏ニ非スカ一  
過ツ時ハ何ヲ以テカ償ハ肥大村所ノ山岩國如ク痘瘡ナシ  
之ノくアハ其傳染ヲ恐レテ山中ニ小室ヲ設テスル夏ナリ少錢  
ヲ受テ是ヲ介抱スル者アル大切ニ臨ト雖親戚中ナラズ又ナシ  
是國ノ制度也一人ヲ捨テカ人ヲ救フ仁者心ナラシカレ用公  
ニ在テハ可也親戚ニ在テハ不可也 山片氏著夢の代卷十九

寛政ノ比池田瑞仙ナル医家痘瘡専門ニシテ五歳ニ鳴リ  
遂ニ江都ニ召サル痘瘡戒草ヲ著ス 同上

享和三年癸亥春ニ三月比ヨリ麻疹流行ス是ヨリ以前ハ  
廿八年ニテリ実ニ安永九年丙申也其前ハ廿四年ニシテ宝曆  
三年癸酉也又其前ハ十七年ニシテ元文二年丁巳ナリ夫ヨ  
リ以前ハ考得ス

西南暖國ヨリ始リテ東北寒地ニ終ル然レニ盛夏ニ到  
レハ止ミテ不発故ニ寒地人ハ過半免ルヲ得ル也其病

タル痘ニ似テ軽ク痕ヲ不成甚キハ二三四五ノ間食ヲ絶テ  
苦臍甚シ毒多クシテ発シ兼ルキハ発蒸ヲ不用却テ石菜  
ノ類ヲ以テ扱テ解下スレハ表発ス必シモ發蒸温補劑  
ヲ施スヲ不許寶曆ノ時戸田舟宮ト云人櫻柳ヲ用テ効ヲ  
アラス一角底耶伽最能効アリ皆用ヒ処ニ依ルナリ先年  
多升广葛根ヲ用シ故毒ヲ解シ得スレテ大切ニ至リシトナリ  
此病ハ痘瘡ト大低同理ニシテ不再発一度煩ヒタル者  
ハ又不預ナリ然レニ初発ヨリ五七日八九日ニシテ小愈ルニ  
到レハ氣冷シク快然タリト雖病後ニセシク毒ヲ食シテ麻

疹ノコトハ古ヘニ有リテ不聞思フニ痘瘡ニテ人多ク死ル依  
テ御靈ノハ所ヲ御請シ藤ノ森ノ神ヲ祭ルナド歴史ニ

見ユ此丹ニ麻疹モ有ヘケレト疫トクニ云タルナラニ疫熱似  
テ発表シ小瘡ヲ出ス類多故ニ石ヘハ分別セザルナリ痘  
日數モ究ハミリテシカト頭ル麻疹ハニキヲハシクシテ其治  
術不一又年數ヲ歴テ流行スル者故ニ醫會師モ常ニナ  
レサレハ治ヲ得ル夏女之テ死ル者多キナラコト歴史ニ時々  
記ス処ノ痘癘流行シテ人多死スト云モノナリ今茲麻疹  
一死至ルモノ八十人二人ノミ夫モ多他疾ト混シ或疹後不保  
護ニ在大低ハ疹ノミニテハ不死ナリ唯初生ノ小兒ハ免ナル  
、夏不能其病不堪ナリ壯婦ハ疹熱ノ故ヘニ墮胎スル

者十三八九夕トヒ臨月ニテ無復ニ分曉スト雖日數ヲ経ス  
ニテ児ハ死スルナリコトシ疹ニ依リテ子ヲ奉サルモ幾千方  
人哀念ヲ故疹ヲ煩ラヒタル人復ニ到リテ再発シ死モ多シ  
又秋ニ至リテ痢ヲ発ル時ハ大切ニ至ル小児ハ多死スコノ其ヨリ  
秋ニ至リテ小児ヲ葬ル夏影シ皆疹後ノ諸症ナリ今年  
疹ニ依リテ児ノ死スル傷産スルモノ幾千万人シカレハ則民  
父母タル人ミカル時節ニ當リテハ其治療ヲ明ラカシ民  
間ノ數匠買藥ヲ改正シ郡村ヲ巡察セシメ女ニシテモ口  
數人減セサルヲ以テ心トスベシ善ナル哉國君ヨリ其術ヲ博  
ク浪花ニ召ス是ニ依テ匠家ニ求テ是ヲ獻ス故ニコニ書  
テ後世ニ賜ス

中原氏云麻疹疹トテ別ニ替リタル夏モナシ只長沙氏ノ傷寒  
病例ニ倣ヒ始ヨリ大陽病ト見テタニク傳染シ其症ニ從ヒ夫  
々ニ劑ヲ処ス其方劑ハ葛根湯葛根加半安湯葛根加  
桔梗湯大青龍湯小青龍湯一杏甘石湯白虎湯黃  
連解毒湯麥門冬湯葛根芩連湯黃芩湯甘草  
桔梗湯加犀角涼隔散等ヲ用ヒ切ヲ取リ其他解毒ノ  
神丹ナド其症ヨリテ兼用ノ夏モアリ又翁仲仁謬仲淳ナ  
麻疹論及立方モ有レ氏草匠シカト覺悟ナシ娠婦ハ胎ニカ  
ハラス先ハ前法ヲ症ニ從ヒテ用ルヲヨシトス滋血安胎ノ



ス内ニ墮胎スルヲ却テ速ナリ一時モ早ク熱ヲトリ收ムル方却  
テ安靜トナレ疹後ノ諸症差後外未ノ邪及末症雜病  
ニ至リテモ其毒ノ有無ニ隨ヒ種々品々アリテ定ル莫クシ

並川氏云今年ノ麻疹其初起頭痛発熱惡寒咽喉痛

ムニ葛根湯加桔梗湯ヲ用ユ惡寒ナク熱甚ク吐アルハ古必

乾ク葛根苓連湯ヲ主ト初ヨリ下劑ヲ無スルハ葛根加半夏

湯五七日ニシテ不発ハ熱甚故也桂枝越脾湯熱甚毒深ハ

越脾湯或葛根苓連湯ニ加石羔又ハ裡石散兼用ルモ

凡也十四十五日二十日ニ及ヒテ依然トシテ不発ハ別ニ時氣感冒

ニシテ葛根加味ニテ日ヲ逐フ已ニ発ノ後必吐氣ヲ以テ或咳

甚不食スルハ黃連解毒加石羔也此症不渴シテ多下痢

ス石羔不當ニ似テ実ニ石羔ヲ取ルモヨシ虚咳ニテ解毒ヨロシ

カ子レハ竹葉石羔湯ヲ用ヒ竹葉參ノ加黃連カモシ咳甚シ

ク或ハ吐甚シク湯藥不下ニ別煎犀角ヲ用ユ甚効アリ

解毒方中加犀角モ亦可也差後唯石劑ヲ過用スル

害ナシ一男子年十九歳他医療スル後諸症悉ク治シ

テ唯下劑不止日ニ十餘行其医四零劑ヲ用ヒテ不尚止脈

沉遲熱方クシテ不食不渴石劑ヲ可用ナレ只其腹急急

ス四逆散加黃連石羔ヲ与フ八日ニシテ治ス其他石劑ヲ用テ

奇功薄ル夏不支將軍劑ノ如キハ小子未能ハル也故ニ用

差後食傷ノモハ其毒未悉也解毒可也差後陰陽易  
ノモハ二人ヲ療ス黃連解毒地黃ヲ用ユ差後病ニ変スモ  
ノ京医是ヲ目ニテ疹毒病ト云一男子差後十餘日冥熱往  
来虚羸咳逆盜汗不食脉沉數小子前医ノ石羔ヲ不用ヲ  
聞テ所棄石羔湯ヲ用ユ病勢半ヲ減ス後七日ニシテ更ニ下  
利ヲ加ヘ諸症前ヨリモ同シク唯熱女子キクニ轉ニテ半安鼈  
甲湯ヲ用ユ別ニ小子家制癆ヲ治スル丸ヲ用ユ二月ニシテ効ヲ  
収ム其他初ヨリ癆ヲ帯ルハ皆死ス夕ノ疹後ニ死スルモ  
ハ前治ニテ三人ヲ治スルノ婦人小兒皆前治ノ如ク唯婦  
人乃子中ノ者先疹ヲ療シテ後補血ス差後前治ヲ病ムハ  
餘毒未及也更ニ湿邪ヲ得テ然ラレハ葛根芍藥連解  
毒劑ヨリテ用ユ通論麻疹ハ一種ノ熱毒故ニ寒涼  
劑切ラサム今流行ノ疫ハ大陰ト云ヘレ附劑切ラ収ム疹  
後傷厥冷吐中甚シキモノ兩三人ヲ治ス皆附子瘦米  
湯ヲ用ユレハ疹後傷或ハ更ニ流行ノ陰氣ニ感シタ  
ルナラント覺ユ

中川氏云麻疹ハ天行一種ノ疫ニシテ其血液ニ混淆シテ  
外発スル也死爾痘瘡ノ症ト相遠カズ但其膿層  
ルトセザルト別々古人有漿麻疹論アレハ愚シラス麻  
疹隆盛ナリレ間日ニ診視スル処百五十二下ラス更審相

寮殆ト數百人ナラント其間數人痘瘡水痘ノ症ニ逢フ  
 未タ一人麻疹有幾ノ者ヲ不視古人不欺ヘシ愚見ル処ノ  
 不廣ナラシ但漿化スヘカラサルモノニ漿化ス愚ヤ歎ナキ更  
 不能故ニ棄テ不論古人治方諸家亦異アル大抵昔  
 契透癩ノ數也痘瘡ノ諸症多端治方ノ審悉ニ似ス  
 其著書モ痘瘡方論多ク門ヲ揚ケ併ヒ訖其麻疹成  
 書アルヤ塵々シカレ凡其論ル処輕視スルニモ非サレハ察ス  
 ル処常ニ有サル病故豈其周匝ヲ欠ナラシカ亦不可知  
 明匠間用西河柳独種散自アリ治疥癬癩聖々ナリト  
 麻疹癩癩ニテ不出出喘咳煩悶躁ヲ治ス  
 檉石散トテ麻疹險惡ノ諸症ヲ治ス愚モ多分用ヒテ奇驗  
 ヲ得ル愚ノ麻疹通症ノ治療ハ別手段ナク古人諸家清涼透  
 癩ノ諸劑選用シ自然運化ニ任セン諸別ニ枝切ラズメ  
 ナルニ其險惡疹愚ノ大窘急ノ諸症尤ノ如シ諸症疹  
 子元運太過ノ者不浮ハ必破血ス衄血下血經血ノ類是ナリ  
 女壯人疹中衄血滾々往ル如クニシテ其罟ヲ易ク凡三升  
 疹子陷皮面負蓋喪急裂裂帛ソノ兩肘ヲ緊シク拈リ冷  
 水漫巾天庭ヲ掩ヒ麒麟血末鼻中ニ吹入圭支湯方中  
 加阿片分許是ヲ飲シ衄漸止疹復出ル疔妊娠出疹  
 胎多墮ス唯契強強壯ナラサルモノ清解諸藥保ベシ

壯熱もノ浮血度ヲ得下利不<sub>レ</sub>宜ニ叶<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>墮<sub>レ</sub>ヲ可得分晚  
或ハ崩血もノ疹子内陷顔色青慘調護藥中阿片  
必不可欠兪暴下利もノ咳嗽強甚もノ必阿片ヲ可用頻ニ  
奇驗有小兒五六厘ニ至ル大人ハ一分四五厘疹<sub>レ</sub>発熱大  
過胃中懊懣呼吸不利謔語妄誤もノ自然破血  
ヲ待ハ甚迂ナリ刺絡セズハ有ヘカラス攻下セズハ有ヘカラス  
嘔吐強盛者温湯ヲ以テ其踝ヲ浸ス妙トス蛔逆嘔吐  
モ亦許多烏梅丸理中安蛔湯經過多驗アリ疹後  
ノ痢一應疎條ニ宜シ唯甚者ハ夜間阿片ヲ用ル<sub>レ</sub>女  
許元運ニ服當セシメサルヲ以要トス繆仲淳西河柳葉  
調砂糖服シテ疹後ノ痢ヲ治ス愚モ是ヲ用テ効アリ

疹後咳嗽声哑者ハ鄭重診視セシハ有ヘカラス卒然馬  
脾風状ヲ発シテ救フヘカラス輕者砂糖劑蜂蜜劑防虞  
セシハ有ヘカラス疔疔ニ阿片蕃紅花選用スヘシ疹子終始  
者法唇舌古ニシクハナシ其攻スニバ有ヘカラス者舌苔乾燥其発  
鬆化ノモノ唇舌濕潤必懇察シテ悉ス阿蘭人治麻疹ノ  
説アリ愚シ銘シテ法トスツトメテ元運ヲ保護シ其大過不及  
ヲ弁クス至言ナルナリ右數件ハ倉卒不詳悉皆實驗  
ノ者ノミヲ呈ス

堤氏云麻疹ノ病症惡寒發熱咽喉痛ニ咳嗽アリ

眼目シテリ飲食ヲ不好ニ三日ニ至リテ下利スル一日ニ五六行  
嘔吐衄血出テ九日十日下利止ミ小便利シ十二日熱退キ  
食漸進ム是輕症ナリ重キハ是ニ反ス増寒壯熱ノ諸  
症アリテ面部痲疹ス発ス少許皮下隱出シテ不出煩  
燥譫語七八日ニ至リ疹多出テ兩便秘結シ遂ニ衄血  
ナシ嘔吐ナシヤウヤク浮腫ニ至ル時ニ喘滿テ氣セハシク痲癩  
ニテ伏シテ懷症狀ノ如也治法ハ荊防敗毒 回春金銀  
花ヲ去リ芩連ヲ加フ惡寒發熱譫語咽喉痛モノヲ  
治ス小柴胡湯 傷寒 桔芋連薄殼ヲ加フ乾吐発熱飲  
食スニナル者ヲ治ス加減涼隔散 回春 咽喉痛甚シ  
舌黃白胎潮熱ノモノヲ治ス竹葉石膏 傷寒七八日兩便  
不利喘滿氣急譫語嘔吐懷症狀ノ如モノヲ治ス右  
有國君エ呈スル処ノ医論也

履軒先生云諸説何レモ的當論ナルヘシ然ルニ石膏ヲ用ル  
ト尚未專医コノ規矩ヲ脱セサルニ似タリ予嘗古医ノ名言  
ヲ聞曰初発症ヨリ各主劑アリ但石膏ハ痲疹ノ好藥ナ  
リト心得ルトヨシ姑ク其能毒ヲ忘レテ二三莖ヲ其主劑  
ニ和シテ用ヘシ其性主劑ト反シテモ不苦妙藥故ニ必切  
アリ後來惡症ヲ不発一カ一石羔ニテ小害有モノ五六服  
ノ手劑ヲ轉シテ其害ヲ救ヘシ妙藥故大害ヲ去ス

十三此說モ亦後世ニ傳フヘキヤ 已下内科選要ヲ引故ニ零ニテ不抜以上夢の代抄

古夏談云成尊僧都ハ仁海僧正の眞の弟子也仁海

或女房子密通シ男子を生シ母堂云ク此兒

成長セシ此夏自披露以カクシク水銀を嬰兒

ニ服セシ水銀を服セカ人モ存命ナラハ其

陰不全ト云件の僧都男女子於シ一生不犯ノ人也下云

按本州綱目石類子載医学入門云婦人難産

催生下死最速服之絶孕云

痘疹初熱并一名

序熱 始熱 初熱 發熱 發始

身熱 害熱 發境 火燒

見點 見苗 見痘 見形 見喜 初出 始出

出痘 出見 放苗 放標 放痘 報苗

報痘 報影 報點 報痕 發標 熱點

起脹 起長 起發 起泛 起胖 長發

痘焮 小脹 漸起 瘡綻 水漿 放白

長水 發胖 發秀 痘綻 痘胖

灌膿 灌漿 貫膿 貫漿 成膿 成漿

會膿 成實 化膿 化漿 漿滿 漿足

聚膿 行漿 盛漿 作漿 蒸漿 乾漿

銘漿 脹漿 充灌 大灌

收靨 收結 收膿 收疔 收脹 回靨 回漿

回水 結靨 結痂 痘痂 痘幽 痘黝 痘押

結甲 翠元

落痂 落靨 脫落 脫刺 脫痂 痂落 痂解

靨脫 掉靨 回脫 收脫 瘥後 革查

以上治痘要訣ニ見タリ

嘉永五子歳比ヨリ和蘭種痘ノ法蠻舶スト西洋医家專ラ

此ヲ施スト始長崎ヨリ始リ痘種ヲ京師ニ傳フト云 委ニキ復ハ  
蘭医ニテ

知レル其去ハ古來施シ來リテ法ト異ナリ痘痂ヲ不用シテ

施スナリ固牛痘ト云 牛痘法種痘法散花  
金農種々著書出タリ 浪花京師一般ニ

評アリ左レ氏半信半疑ニテ諸説紛々タリ漢医種痘ス

ル人モアリ素人種痘施ス人モアリテ至テ仕易キモノナリ或西科

ハ類リニ誹ルモアリテ一般不穩愚考ルニ種ノ上好モノニテ

小兒稟受虚弱ヲ委々察シ時候ノ宜敷四月三月八月九

月ニ種レハ年夏ナルヘシ又一度ニテ種痘見点スルハ至ニ可也

再三ニ及見点セザル者ハ不宜ベシ何分痘種ノ上好可擇ブヘシ

譬言ハ京地ノ水菜ノ種ヲ在在ニ下種シテ其歳ニハ京地如モ生ヌ

其種ヲ又翌年下種スレハ昨年ニ透ヌ又翌年下種スレハ三年目

ハ土地通リ物ナリ此道理アリテ次第ニ種痘スル種ナレハ

百人カ百人同様ノ痘ニ成カタルニ依テ其上好種ヲ擇ヒ種  
 痘スヘシ又天切痘ニ感ズル者ト云ハ凡生々感ズ有リ左共  
 十人ニ二人位ハ有ルヘシ又十五歳後ニ至ルハ先痘ハセ又種痘流  
 行セ又前モ年長ノ人ニ痘ヲセ又人浪花ニ數人アリ天啟ノ  
 生誕ノ者痘ヲ免ルト云虛説也 堺屋清兵衛小  
山田氏小兒見ス 痘種ノ善  
 惡ト云ハ昨年モ播及高砂ニ種痘ス後皆再痘ス明在  
 ニ種痘スルニ村不感ト長崎種痘後再痘後人不信大村  
 岩國杯受ヨシ皆信シテ種痘ス再痘ナシ一人前モ七八年定ル  
 ト云東都西方在所受且南東不信伊勢松坂受宜ク  
 伊賀及及不且大坂モ瓦町然路所不信新町花街四口ハ信  
 ニテ東所節ハ不信本津村ハ信ニテ難波村不信福島信シテ  
 北野村不信北河内不信南河内多種痘ス何レ一人ト二人惡痘  
 ヲ引出シ不且ヲ傳玉聞恐レテ不信也風土ニ依リ人知モヨリ又  
 一医ノ巧拙モリ其傳或ハ試ニ施スモアリ一乘ニ論シカタル百人  
 千人共受宜キニ決シタラハ 官ヨリモ御免許アルヘシ何レ十  
 年ノ後ハ不諭シテ明白也強テ求テ種痘ノ思アラハ予カ所  
 謂ノ如ク診察ヲ委クシ好種ヲ得テ且夏ノ時ニ施スヘシ  
 又痘ノ淋世歳後ノ人ニ種痘スルニ見形スル也奇尤者ナリ種  
 痘ヲ施シ惡痘ヲ免セシ時治痘ノカモ不委ハ種痘寺リニ  
 庄寄ヘカラス戴曼公治術匯科ハ研究スベシ



多田五代記云正曆三年春源賴光瘡病治療

千萬不驗諸醫束手儒師舟橋大納言來杜

子美カ詩ヲ授テ愈ユ其句云

子璋觸鬣血模糊 子擲捉還崔大夫

匡夏小言瘡ノ条ニモ五代記ヲ引ケ此句ヲ書シ

水服<sup>ス</sup>世ニ魚<sup>ノ</sup>札<sup>ニテ</sup>截<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>是<sup>ヲ</sup>イ<sup>ヤ</sup>カ<sup>上</sup>ニ書<sup>ス</sup>ル<sup>ナリ</sup>

少瘡ヲ截<sup>ル</sup>ニ非<sup>ス</sup>狢<sup>狸</sup>モ畏<sup>ル</sup>ト云陸<sup>成</sup>翁ノ

詩ニモ作<sup>レ</sup>リ

Vertical lines for writing on the right page, containing very faint, illegible text.



